

## 事業成果報告書

1. 個人または団体名(団体の場合は代表者名も記入)	
ジェンダー視点から考える広域・長期支援者ネットワーク (代表者名:薄井篤子)	
2. 研究または活動のテーマ(課題名)	
中長期支援から見えてきた広域避難におけるジェンダー課題	
3. 助成額	
500,000 円	
4. 実施期間	
2019 年 6 月 ~ 2020 年 6 月	
5. 実施状況	
<p>2019 年 7 月 5 日 第 1 回打ち合わせ(岡山) 本事業のテーマの共有理解を深め、 今後のスケジュールを協議</p> <p>7 月 20 日 第 2 回打ち合わせ(京都) ジェンダー研究の勉強会</p> <p>8 月 28 日 第 3 回打ち合わせ(東京) フォーラムの事前打ち合わせ、各発表の確認 29 日 ヌエック・フォーラム 参加 ワークショップ開催</p> <p>2 月 13 日 第 4 回打ち合わせ(埼玉) 広域避難者支援のあり方について勉強会 26 日 第 5 回打ち合わせ(福島) 広域避難事業についての勉強会、今後のスケジュールの打ち合わせ</p> <p>4 月 10 日 第 6 回打ち合わせ(オンライン) 各事例検討会</p> <p>5 月 25 日 第 7 回打ち合わせ(オンライン) 各事例検討会</p> <p>6 月 10 日 第 8 回打ち合わせ(オンライン) 各事例検討会、報告書の役割分担</p>	
6. 事業成果と自己評価	
<p>2020 年 3 月 11 日の東日本大震災・東京電力福島第一原子力発電所事故の発生から早いもので 9 年 4 か月が経った。長い時間が経った今も、未だ復興途上の地が多く、多くの人々が避難生活を送っている。東日本大震災後も、熊本地震、西日本豪雨、台風 15 号・19 号、令和 2 年豪雨と、多くの地域が大規模災害に見舞われた。東日本大震災から得た学びや教訓は、とてつもなく大きく、その後の災害対応に多くの変化や改善をもたらしてきた。その一方で、議論半ばのままとなった課題も多い。</p> <p>私たちは原発事故によって福島県内外から全国に避難をしている広域避難者の生活再建支援事業に取り組んでおり、研修等で一緒になった際には近況報告をしあう間柄であった。日々の相談業務についての対応</p>	

方針などを相談しあう中で、女性避難者の相談について話題にすることが増えてきた。女性として、女性たちの避難にともなう悩みにどうしても関心を寄せざるをえない心境だった。そうした課題は災害・復興における女性への支援と深く関わってくると考えるが、原発事故そして広域長期避難は特殊な例とされているのか、まだあまりその中で位置づけられていないと感じた。今後の災害支援につなげていくためにも、震災後から相談支援を行ってきた我々はこのテーマと向き合い、自分たちの取組で得た知見をまとめていく必要を感じた。ただ、受託事業を含め、避難者支援の活動に日々追われていたため、じっくり事例を検討したいと思っても、目の前の相談に対応することで精一杯で、「いつかそのうちにゆっくりと」が決まり言葉となっていた。しかし、もうすぐ10年になろうとしている今、着手せねば、と考えて申請した。本助成に選ばれたことで自分たちのテーマとして向き合うこととなり、遠方にいる私たちが時間をみつけて集まった。女性支援やジェンダー視点について学ぶ機会を持ちながら、自分たちの広域避難者支援をどう生かすことができるかと検討する時間を持てた。互いの取組や支援観なども意見交換し、この機会はそれぞれの支援活動への刺激や学びにもなったと思う。

一方、原発事故から時間が経過し、被災地についても避難指示を解除した報道も続き、あたかも復興が進み原発災害も収束したかのような印象が広がることを危惧した。他の災害も起こる中で、全国に散らばっている広域避難者の様子はさらに見えにくくなっていると感じた。そこで、私たちは昨年8月29日に又エックで行われた又エック・フォーラム「男女共同参画推進フォーラム」においてワークショップ「中長期支援から見てきた広域避難におけるジェンダー課題」を行い、各地に広域避難している女性たちの声を紹介し、支援の現場から感じる課題を提示した。日頃地域で女性支援にあたっている専門家である参加者に現状を知ってもらい、関心を寄せてもらい、どのような支援の枠組みが必要なのかを共に考えてほしいというのが開催の意図であった。当日は多くの参加者があり、現場からの報告にじっくり耳を傾けてもらうことができたと思う。「忘れるにはまだ早く、埋もれさせてはいけない、考えねばならないことがまだある」という思いが伝わったのではないかと思う。アンケートには「事故のことは忘れたことはない」「これからも寄り添って支援してほしい」と書いてあり、やや孤立感を抱いていた私たち自身が励まされた。

ただ、ワークショップの準備をする中で、改めて避難者支援の施策や制度に欠けている部分が見えてきた。また発表を通して私たち自身が問題点を整理しきれていないと感じ、もっと災害研究について学ぶ必要を感じた。そこでワークショップ後は、日常の支援業務の傍らで国際的な支援の動向を調べたり、災害ケースマネジメントを始めとする最近の支援研究会や学会に出席して研鑽に努め、メールや研修で会う際に報告をしあいながら情報の共有を行ってきた。そうする中で改めて、私たちの強みというか原点は、ずっとこの間、避難者の声を聞いてきたということであり、その対応の現場から発言するしかないことを痛感した。そこで各人が担当した事例を持ち寄り（3月以降はコロナ禍によって集うことはかなわず、オンラインミーティングという形で）、事例を見ていくことで生活再建とは何か、自立のためには何が必要なのか、との議論を深めてきた。災害後、避難者は避難生活によって困難な状況におかれ一時的に無力になることがあるが、その困難を自ら乗り越えていく力も一人一人に備わっている。私たちは取組事例を検討していく中で、性役割やジェンダー構造からくる差別に押しつぶされるのではなく、避難先であっても個人としての人生を生きることの大切さを認識することができた。そのためにはどのような支援が有効なのか、個々人の力が発揮されるためには何が必要なのか、今回の報告書ではそうしたことの気づきをまとめることにした。本来、助成の目

標はジェンダーの視点から広域避難の課題をまとめた冊子を作成し、又エックでのワークショップに参加してくれた方々のような女性支援の専門家や災害・復興の専門家の方々に提示することであった。しかしまとめに時間がかかってしまい、今の段階では冊子の形式にして提出することができなかった。内容もまだ不十分で整理が必要である。今後、資料も補足して、編集を行い、冊子にしたいと考えている。

震災から10年目を迎える来春にむけて、さまざまな機関で活動記録紙の作成が行われる予定である。私たちの事業でも夏から取り組む。私たちは今回の助成活動の経験や学びを元に、その報告書の中でジェンダー支援からの相談事業の取組成果や課題の整理をすでに提案し、承認を得ている。他の拠点も巻き込みながら、災害後の生活再建支援においてジェンダーの視点が不可欠であることをはっきり書き残し、教訓にした。原発災害によって苦しんだ人は多い。その中から一つでも得たものがあることを示したい。

## 7. 提出成果物

「中長期支援から見えてきた広域避難におけるジェンダー課題」報告書